

巨蟲ハンター ～ハン
ターで死んだら現代で
何故か巨大虫と戦う羽
目に～

紅鬼

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

初めまして、お久しぶりの紅鬼です。単行本の分まで書いて行きたいと思います。

まあ、相変わらず文字数は少ないですし、解らないことや誤字脱字あったらバンバン報告してください。

4 3 2 1

--	--	--	--

22 11 4 1

目次

皆は転生、って知っているよね？うん、輪廻転生の転生、けど俺が言うのはちよつと違う転生だね。多分皆はここまで読んで既に気が付いていると思う、俺は転生者、属に言う神様転生をして特典として『少しだけ良い運』と、『努力する程強くなる体』を貰って『モンスターハンター』（フロンティアじゃあない世界）に転生した、それからは特典と自身の地道な努力、諦めない心や出会った仲間達と剣盾斧鎚弓銃を背負い、色々な狩猟に挑んだ。

小さな村の開拓に幼馴染み（♂）と挑んだ毒怪鳥と荒鬼蛙の同時狩猟（十代後半で）、仲間達と火竜夫婦との死闘（二十代前半）、仲間（♀）を失った炎王龍との防衛戦（三十代後半）、仲間の子供達と挑んだ緑迅竜の狩猟（四十代前半）、狂竜ウイルスに挑んだ他の転生者の為に行った轟竜討伐（五十代前半）、そして最後に挑んだ、炎王龍の砦襲撃（五十代後半）、新大陸での調査の基盤作り（七十代前半）、炎王龍との決戦（八十代前半）……。

思えば長いようで短い人生だった、因みに炎王龍に挑んだ装備は蒼火竜乙に叛逆の盾斧ガルレギオンだったかな？え、死んだ時の状況？普通に炎王龍討伐した後にベッドで

仲間の孫達を見ながら寝るように死んだよ？嫁？出来なかったよコンチクショウ。

だから、今日の前に俺を転生させた馬鹿神様がいるのはおかしいんだよね、うん、これは夢だな、きつとそうだ。

『(*、▽、)ノ久し振りだね。転生者君、早速だけど君に頼みたい事があるんだ。』

あー、ホントに久し振りだね、馬鹿神、略して馬神、頼みたい事？却下です、俺はもう充分に人生を生きた。だから普通に輪廻転生させてください。

『馬神ってなんだよ。輪廻転生したい？だが断る、理由は、君の人生が面白くなかったからだよ(＃?3?)ブーブー。』

この馬鹿神様は、そんな下らない理由で転生させたとか、だから馬鹿神様って呼ばれているんだ！その老人の姿と立派な髭は飾りか？バーカ！バーカ！

『だってさ、君もあのときは「やり直せるなら、馬鹿神様の暇潰しでも生きて見せる！(キリツ)」とか言っていたじゃん！だから期待したんだよ？踏み台転生者と死合いですと思ったら改心させてしまうんだから！私の努力返せ！バーカ！』

おまつ！だからアイツ初見でモブジジイとか言ってきたのか！つか、あの時の黒歴史掘り返すな！バーカ！バーカ！

『おまつ、神様に向かつて馬鹿馬鹿言い過ぎだ！バーカ！もう良いたくさんだ！お前を目的の世界に送ってやる！その世界の主人公達より少し年上にしてアイテムポーチ型

アイテムボックスと最後に挑んだ狩猟の装備にオトモアイルー、更に一番肉体が充実した能力を特典にしてな!』

ちよつと待てええっ!?!何だその軽いチート!?!いったい何処の世界に飛ばすつもりだああっ!?!G O D喰いかっ!?!G A T Eかっ!?!なのはかっ!?!彼岸島かっ!?!

『なんと、巨蟲列島じゃ。知らないだろ?知りたいだろ?教えないぞ。』

何だその世界はああっ!?!タイトルからして巨大な虫が出そうじゃあ無いk 『行つてらっさーい、バター王。』ちよつと待てやこらあああっ!?!

★★★★★

『やれやれ、やつと行つたか。さてと、……………今度こそ儂を楽しませてくれよ?転生者、古宮大地よ?』

「何処だ此処？てかアスファルト？此処は現代？何？俺は巨大虫と戦わないで現代世界にプチチート持って飛ばされたのか？」

転生っていうか、飛ばされた俺だが、現在、飛ばされた先にあつた田舎道を移動している。因みにアイテムポーチはアイテムボックス化、他の装備や盾斧以外に使っていた各種武器なんかもしっかり入っていた、更に消耗アイテムは各99個、秘薬、いにしえの秘薬も99個入っていた。

「とりあえず、装備とアイテムは狩猟用のアイテム編成にするか。」

因みにこのアイテムポーチ、アイテムポーチとアイテムボックスの機能を切り換えることが出来た。アイテムポーチモードだとすぐにアイテムが出せるから、非常時にかなり役立ちそうだ。とりあえずだけど、装備はブラキXに、叛逆爪セルレギオン、アイテムポーチの中身は、調合書1〜5に、回復薬、回復薬グレート、強走薬グレート、漢方薬、秘薬、いにしえの秘薬、生命の粉塵、力の爪、守りの爪、こんがり肉、研石、ペイントボール、閃光玉、素材玉、毒けむり玉、毒テングダケ、ハチミツをアイテムポーチ

にしまった。一応言うが、毒テングダケと素材玉を入れたのは虫対策、効くか解らないが一応念のために入れておいた。

「さてと、……辺りを調べるか。」

因みに俺の見た目はホントに若返っていた。白髪は元の濃い黒髪に戻り、皺のあつた顔は二十代前半の健康的な色に戻り、身長も187cmまで伸びていた。てか死ぬ間際なんて身長175cmだったぞ？腰も曲がっていたから視界に慣れなくてビックリしたわ！

そう考えてとりあえずアスファルトの道を移動していたけどさ……。

「静かだな……。」

生き物の気配は結構する、けど此方を観察しているみたいで、何処か気持ち悪い。自然はかなり豊かで海が見える、何となくだが、島のような感じの場所に飛ばされたみたいけど、アスファルトがあるなら人が多分いると思う、ようはあの馬鹿神様は虫の被害に困った人をハンターとして得た力や武器防具で無双をしている姿を見て楽しむつもりだろう。

正直言つて無双する気はない、確かに虫によつて人が困っているなら数を定期的に減らすために駆除はするが、付近の虫を全滅させて生態系を破壊する真似はハンターとしてやってはいけない行為だ。だからあくまで俺は間引くだけにする。馬鹿神様の迷惑

に嵌まる気はない。

………と、言ったが集落も人も山小屋すら見つからない、海が見えるから漁村か何か見つければと思っていたが、海までまだまだ距離が有りそうだ。

と、思っていたら木々の向こうに蝶が集まり出したのを遠目に見た、が。

「何だありや？ドスランポスみたいなサイズだな……。」

遠目に見てそれくらい有りそうな蝶が集まつて「いやあああつ!!」うん、あんなサイズの虫、会えば悲鳴上げる、つて、誰か襲われているじゃん！襲っているのが蝶々でもドスランポスと同等のサイズなら大怪我じゃあすまない！距離が結構離れているが、若返つて充実した体力があり、なおかつ旧砂漠や密林のように走りにくい場所じゃあ無いかからか、ぐんぐん距離が近d「いやあああつ!!」別の悲鳴みただけど同じ方向っぽいしもうすぐ其処だ。つてか複数人がいるならとりあえず閃光玉で蝶の目を潰して避難させる必要があるな、よし。到tY「ギヤアアアツ!!」女の子が蝶に刺されているじゃん！だらつしやつあああつ！閃光玉あああつ！

★★★★★

伊能 愛Sa id

「いやあああつ!!」

サイアクだ。しかも訳が解らないよ！何で!?僕はただ用を足そうとして離れただけ

なのに！何で、アゲハが僕を襲っているの!?アゲハって蝶々でしょ！花の蜜とか吸うんじゃないの!?こんな島でパンツ丸出しでアゲハに襲われるなんて何がどうなっているの!?

「いやあああつ!!」

い、委員長つ!?に、逃げなきや！こうなったら恥ずかしいとかそんなのどうでもいい!?!いやあああつ!!アゲハが僕にのし掛かって来たつ!?え、……何?やだやだ!漏れ……、つひ!アゲハが僕のお尻をつついて……!?

「ちよ……やめ、いやだあ……。」

怖い怖い怖い怖いこわいっ!!やだやだやだやだつ!!委員長つ!見てないで助けてよ!!漏らして汚いとかそんなのどうでもいい!委員長でも神野でもいいから助けて……『ジヨブツ!ジユブツ!』あ……。

「ギヤアアアアツ!!!」

痛い!痛い痛い痛い!アゲハが僕を刺した!やだ!痛い!殺される!何か吸っている!?やだ!誰か!委員長でも神野でもいいからつ!僕を助けてつ!

その時、僕の背中で何かが強く光って、背中にのし掛かった重さと吸われる感じも無くなって。

「大丈夫かつ!」

僕はお伽噺のお姫様見たいに、ゴツゴツした鎧兜を着た誰かに抱えれていた。

★★★★★

古宮 大地 Said

危なかった、あの蝶は人にストローみたいな口を二つ、お尻に刺していた。他にも蝶はいたみたいだし、とりあえずブナハブラやランゴスタ落とす感じで閃光玉を投げたら上手く蝶達の目を見えなく出来、更に吸っていた奴も怯んだみたいだ。その隙に蝶2頭を蹴り、吸われていた女の子を抱き上げて閃光玉の光で目が見えなくなったのか、騒いでいる数人の少年少女の元に走る。とりあえず閃光玉の効果がまだ効いている内に女の子の怪我を見ないと。

「大丈夫かつー！」

「……………あ、……………っひ。」

そうとう怖かったのか、それとも下着を丸出したから恥ずかしいのか。女の子が抱き付いて来たが今俺は防具、しかもG級の着けているから痛いよ？とりあえず引き剥がすように女の子を下ろしてうつ伏せにして、お尻の刺し傷に回復薬グレートをバシヤツ、と掛けて、少し痛いだろうが肉を寄せて止血の為に布で固定する。これで大丈夫だろう。

「……………な、なんなんだよあいつら……………」

「あああ……………」

「ま…、まじかよ…………、人を刺して食うのか…………。」

「ひいいいいっ！」

「いたいいたいっ！たすけてえ!!」

っ?!もう効果が切れたか!しかも少女少年達に襲いかかっているじゃん!間に合え!

「真美ちゃん!!あ、え”っ!!」

くそ、思った以上に蝶の数が多く上、人がバラけたせいも蝶もバラけている!既に少年の一人が蝶に刺されて干からびている。ゲリヨスソウルの髪型の少年も左目にストローのような口を深く刺されて吸われ始めている。まだ刺されて無いのは先程スレ違った眼鏡の少女に新しく合流したのか?ジャージを着て鉢巻きを巻いたガタイの良い少女が蝶に組み敷かれていた。ガタイの良い少女の方には新しく来た帽子の少女が走って行ったが距離が俺と離れている、仕方ないが眼鏡の少女を助けるために蝶に向かって叛逆爪セルレギオンを抜き、走り出した。

「……………っ?!何をっ?!」

眼鏡の少女が怯えた表情で此方を見たが、気にせず双剣を蝶の顔と胴に降り下ろす。『ザシユ、ズギヤッ!』と簡単に蝶の顔と胴に双剣が入り、切り裂いた。てか以外にもろ

いんだ。

『シユゴオオオオツ!!』

うわお、帽子の少女、火炎スプレーで蝶を焼いて倒したのか？あ、他の蝶が急いで逃げている、少女は蝶の弱点をついたのか？それとも咄嗟の判断「睦美！睦美いい!!」あ、眼鏡少女忘れていた。

なんか感動の再会みたいだし、俺は先程のポニーテールの女の子を連れて来るか。

「なんなんだよこりゃあ!! 一体どーなってんだよっ!! お前知っているなら説明しろよっ
!」

「アンター! さつき委員長を助けた時、それでバケモノアゲハを殺したわよねっ! じゃあ
この島の島民なのっ!」

「てか何だよその格好っ! お前本当に人間なのかつ!」

「何処か安全な場所はないのですか!?! 三日あればきつと救助が来る筈なんです!」

ポニーテールの女の子の様子を見に行こうとしたら、絶賛少年少女達から質問責めに
あっている、とりあえず四人とも少し興奮しすぎだ、酷いと思うが、幾ら騒いでも死ん
だ人間は生き返らないし、状況は変わらない、むしろ騒ぐとまた蝶や他の虫が、……居
るならよって来るかも知れないし。

「あー……。一つずつ答えて行こう、まずは鉢巻きの少女、悪いが俺はこの島の人間じゃ
あ無い、そして反り込みの少年、俺は人間だ、これは甲冑みたいな物だ。モジャモジャ
の少年、説明はできない、俺も先程何も解らないままこの島に落ちたからな、しないで
はなぐできないのだ。んでもって最後に帽子の少女、安全な場所は俺も探している途中

だ、良ければ君達と一緒に安全な場所を探したいが、君だけには聞けないな、君達全員で決めてくれ。」

少女少年達にそう言つて（反り込みの少年が何か騒いでいたが、無視しよう。）先程の蝶から助けたポニーテールの女の子が踞っている木の陰に行く、ちゃんとジャージのズボンを履いて踞っていた、最初見た時はお尻を丸出しだったから、ある意味蝶よりビツクリしたけどね、とりあえず声を掛けてみよう。

「……刺された傷の具合は大丈夫か？」

「……………コクン。」

俯いて静かに頷いている……。相当シヨックだっただろうな、俺も初めてランポスやアプトノスを殺した時はシヨックを受けたし……。

「……………怖い思いをさせてすまなかつた。」

「……………助けてくれた以上、僕に謝るのはおかしいじゃないかい？」

「……………そうかもな、……昔、俺も似たような経験をしてシヨックを受けたからな、それと重なつたのかも知れない……………」

正直、その時は幼馴染み（♂）が必死に声を掛けてくれたから、俺も納得、いや、割りきつたんだな。兎も角、女の子も口数が少し増えて来ている、やっぱり誰かと話をするのは良い事だよな。

「……謝るのはおかしいけど、……僕を助けてくれて、……ありがとうね。」
「……………ああ。」

女の子の微笑みと感謝の言葉、プライスレスだね。やっぱり女の子は明るい方が良いけど、前世も前前世もお腹黒い女の子の人が結構いたからな。うん、だから前世も結婚しなかったんだよ！だって怖かったし。けど目の前の女の子の微笑みはグツジョブです。

「あ、自己紹介がまだだったよね？僕は伊能愛、鳳翔高等学園の2年2組、ワンダーホーゲル部に所属して、簡易地図を委員長、あ、さつきいた、眼鏡の女の子と作っていたんだ。……で、命の恩人さん、……貴方は？」

確かに自己紹介とか、さっきの少年少女達にもしてなかった、てか、質問責めにあつてそれどころじゃなかったけどね。てか、簡易地図？前世みたいな大雑把な地図でも有れば嬉しいな、てか、ワンダーホーゲル、って何だ？そう考えていたら凄い期待した瞳で女の子改め、伊能さんが此方を見えています。……簡単に自己紹介をするか。

「古宮大地、一応、危険生物の駆除や間引きの仕事をしていて、この島に来たのは帰りの飛行機が墜落したからだ、仲間は居ない……。」

うん、間違いいではないな、モンスターをハントする仕事とか洒落でも言えない、言つたらきつと危ない薬やっている人か、頭のおかしい奴と思うだろうし。

「古宮、大地さん、だね。うん、大地さん。危険生物の駆除……、だから閃光手榴弾とか

持っていたんだ。けど、危険生物専門のエキスパートなら、さっきの鉋？とかあるし、僕がさっき刺された傷もすぐに直す魔法みたいな薬もあるから、さっきのアゲハが来ても大丈夫だね。」

そう言つて立ち上がり、ズボンについた砂ホコリを払う伊能ががブラキX装備の冷たく、硬い腕に抱きつく。え？何これ？凄い笑顔だし？本当に何これ？

「だいが委員長達を待たせだし、そろそろ向こうに戻つて大地さんの事を紹介しよう？きつと委員長と織部さん、帽子を被つた委員長の友達だね。後は織部さんと一緒に居た松岡さんは心配していると思うんだ。あ、皆には僕から大地さんの事を説明しておくよ？」

確かに、考えてみれば自分達が知らない人間と学友が一緒に居ればマトモな人間なら心配するだろうな、うん、最悪助けたお札に悪戯しているとか、やっぱりあの人は変態で学生に手を出す性犯罪者、とか思われるかも知れない……。うん、そんなのは断固として嫌だ！……。ん？何か音が聞こえるな？アルセルタスみたいに高速で薄翅を動かすような音が……。

「……ん？なんか皆のいる方からすごい音が聞こえるね？あ、もしかして救助のヘリコプターかな？」

「いや、……虫の羽音に似ているように聞こえるな。急いだ方が良いかも知れない……。」

「え?……そ、それってもしk 「いやあああつ!睦美つ睦美つ助けてっ!」委員長つ!」
当たり前みたいだ、声の主はきつと眼鏡少女こと委員長さんが襲われているようだ、とりあえず伊能さんを問答無用でだっこして走り出す、其れほど距離が無いためすぐに少女少女達と合流し、踞る少女以外の全員が見上げる方を見ると、デカイ蜂?クイーンラングスタよりデカイ、アルセルタスよりちよつとデカイ蜂が眼鏡少女の背中に針を撃ち込んで飛び去って行く光景だった。

「い、委員長が、……蜂に刺された?」

「何してんだっ!助けに行くぞっ!!」

鉢巻き少女の声に少女少女達が再起動を始めたみたいだ、しかし、蜂かあ、大抵の毒なら漢方薬で打ち消せるけど、あの蜂の行動、ちよつとネルスキュラに似ている気がするし、さてどうするかな……?そもそも巣がどんな場所にあつてどんな感じの物か、それが解らないとちよつと怖いk「居場所は大体見当がつかますっ!!」あ、帽子の少女、あの蜂知っているのか?

★★★

織部睦美 said

「三日もすれば救助隊とか来るんだろ?」

神野さんの言う事を聞いて、ジガバチの生態を知る私は焦ってしまう。そんな悠長に

三日後に来るかも知れない救助隊を待つ時間はないのに！

「3日も待てませんっ！千歳ちゃんを連れ去ったのはジガバチの仲間っ!! 3日経ったら千歳ちゃんに産みつけられた卵が孵化して食べられちゃうんですっ！巣を探して助け出さないと!!」

「いやああああっ!!」

私の説明を聴いた皆が絶句、三浦さんだけは絶叫している。ああ、もうっ！私には説明をしている時間すら勿体無いのにつ！

「睦美……、こんな薄情なヤツらはほっといて早く助けに行こう!!」

「は……、はいっ!!」

絶句している皆さんと違い、千歳ちゃんが連れ去られた時から助けに行くのに賛成していたキャプテンさんが私に行こうと声を掛けてくれました。少しだけ希望が見えた気がしましたが……。

「行かせねえよ。」

先程から千歳ちゃんが死んだとか、自分はリーダーだからと言っていた、……仮称としてリーダーさんがキャプテンさんと私の進路を塞ぎ、睨みを利かせてきました。

「ここは頭である俺の言う事を聞いてもらおうかあ？俺たちが分裂すると生き残る確率が低くなんだろう、ケンカでもなんでも頭数が多けりや多いほど、有利に働く、つてモ

ンだー！」

「まあ確かに、睦美ちゃんの知識はバカに出来ないよねえ。」

「普通この訳分かんねえ状況で助けになんか行かねえよ。」

「人食い蜂の巣に行くなんて、賢い人間のすることじゃないよねえ。」

「同く感々。」

「私達だけで助けに行く！」

リーダーさんの言葉に賛成するように甲斐さんと神野さんが言います、唯一キャプテンさんだけは助けに行くと言ってくれますが……。

「じゃあ皆に訊くが……、命を賭けてまで委員長を助けに行きたいのか？」

「当たり前だっ！」

「……わ、…私も……。」

「真美ちゃんは怖くて助けになんか行けないよねえ？」

「!! は、……はい。」

「ほら、みんな俺と同意見だ。」

「……た……、助けてあげないと……、ダメだと思えます。」

「それでも4対3で決まりだな。」

「そ……、そんなっ!!」

三浦さんだけは助けに行かないとダメ、そう言いましたが、リーダーさんはそれでもダメだと言います、すぐには命を奪われない筈ですが、千歳ちゃんの身体には巨大化したジガバチに刺された傷もあるのに！

「俺は頭としてみんなを危険な目にあわせられない……、そうだろ？」

「女相手にナニむきになってんだよ？」

「女だから殴られないとか思ってたんじゃないやねえよな？」

「リーダー、頼りになるとこみせてよっ！」

「ソフト部なめんっ!!」

リーダーさんとキャプテンさんが一触即発の雰囲気になって、こんなことしてる場合じゃないのに、……なんとかしなきゃ……、なんとか。そうだ！携帯のGPS！上手く行けば千歳ちゃんを助ける理由になる！

「また何もめているの？織部さんと松岡さんはともかく、さつき僕が言った助けあいしなきゃ行けないって話、聴いてなかった？」

私が携帯の電源を切ると伊能さんと甲冑の人が戻って来たのは同時でした。

★★★★

Said 古宮大地

騒ぎを聴いて伊能さんと少年少女達の所に戻ったら一人居ないし、かなり険悪な雰囲気

気だ、どうやら先程蜂に拐われた少女を助けるか助けないかで意見が別れてしまい、帽子の少女、織部さんと鉢巻きの少女、松岡さんが引き下がらないらしい。と、伊能さんが説明してくれた。

「……正直言うとうと委員長を助けた方が良いと思うんだよね、僕が作る地図、委員長が分りやすくまとめてくれないと正確なの出来ないからね……。」

伊能さんがそうみんなに伝えると全員の視線が俺に集まる、つまり俺の意見を聞きたいのか？ふむ、助けに行かないと思う人が四人、助けに行きたい人が四人、助けに行くと言っている人の方が知識がある人が集まっているんだよね、だから上手く行けば委員長さんを無傷で助けられる可能性がある、けど一歩間違えたら無防備な姿を蜂に晒して全滅か……、何かリーダー君を納得させる物があれば良いけど……。

「あ、あの、私の携帯壊れちゃったんですけど、誰か使えるの持っていますか？」

「あく？海に落ちた瞬間壊れただろ？」

「スーパ―防水加工とかついてないよ。」

「僕の携帯も壊れちゃったね。」

「そんなのあつても仕方ないだろ？」

「……すまない、持っていない。何かに必要なのか？」

携帯か、前々世ではスマホ持ってたけどね、耐水耐圧対衝撃の奴。

「携帯はGPS機能で現在の居場所や標高が分かったりするから。」

「そんなの分かってなんになるんだよ?」

「地形でそこに生息している蟲たちを、ある程度想定することが出来る更に標高が分かれば蟲たちの種類を絞り込める。」

「そんなことがなんで分かるんだ!?!」

「蟲はとても温度と湿度に敏感なの、山を歩いていると少し標高が変わるだけでさつきまで沢山いた蟲たちが居なくなり別の種類に変わる、だからあらかじめ生息している蟲たちを予想できれば急には襲われない。」

「更に言うとならば標高が分かれば正確に地図が書けるよ。」

「は?・そういうモンなのか?」

確かに蟲の生息圏が解り、種類も判別でき、急に襲撃されなければ全員の生存率はぐんと上がる。織部さんの言葉を聴いて使える携帯があるからリーダー君が聞くがないようだな。と、思っていたら話を始めた織部さんの口から委員長さんの携帯が壊れてないと告げられ、甲斐君の口からも肯定の声がでる。

「おい、結論出す前にお前も意見言えよ!助けに行くか!?!行かないのか!?!」

「……全員の生存率が上がるなら取りに行くべきだろう、幸いにも帽子の少女は蟲の知識に詳しいのなら蜂の居場所も検討がつくんだろ?」

「……織部です、はい、ジガバチは獲物を捕まえたらまっすぐ巣に持ち帰ります！さっきのジガバチはあつちの方向へ飛んで行ったから、あつちに真っ直ぐ行けば千歳ちゃんがいるはずですよっ!!」

「よし！今リーダーとして決断した！委員長を捜しに行くぞっ!!」

こうして俺と8人の少年少女達は、蜂に拐われた少女を助けるために移動を開始した。

その先で自分と少年少女達との違いがはつきり分かってしまうこともわからず、ジガバチの巣を目指して森の中を歩き始めた。

4

4

現在俺達は繁った場所を織部さんの指示する隊列にて進行中だ、これに関しては織部さんが言うには、

「蟲はうっそうと繁った場所にいるイメージがあるけど、本当は開けた場所の方が沢山いるんです。特に蝶なんかはこういう場所にはあまり来ません。」

つとの事だ。因みに俺は伊能さんを背負って両サイドに神野さんと三浦さん、前には白川さん、後ろに殿の織部さんと女子高生に囲まれています。この陣形にリーダー君、上條君と神野さんが難色を示したが、伊能さんの怪我と万一俺が伊能さんを降ろした後に全体のフォロワーが出来る位置だと、織部さんが説得、松岡さん、伊能さん、白川さん、甲斐君が賛成してジガバチの巣を目指した。

暫く進むと先頭の松岡さんが集落を発見、しかし集落は既にジガバチが巣を作っていた事が解り……。

「まさか……、あの中に入るなんて言わないよね？」

神野さんがそう言ったのを織部さんが入ると答え、ゴキブリが巨大化は絶対しないと

聞いた上條君も突入を決意。松岡さんと三浦さんと白川さんと伊能さんを外に残して民家に入って行く。1階を全員で警戒しながら調べ、2階に上がって行くと、上がってすぐ右側の部屋から物音が聞こえる、それにランゴスタやネルスキュラの巢に入り込んだような空気を感じた。

「俺が開けて様子を見てくる、何か有ったら合図を送るから、そのまま俺が殿になって部屋から脱出しよう。」

織部さんが開けようとするのを止め、自分が先ず開けて様子を見る事を提案すると、上條君、神野さん、甲斐君が頷き、織部さんは不安そうな顔で此方に何か言いたげな顔をしていたが、最終的に頷いてくれた。多分だが織部さんは中がどんな状態か、想像が出来ているのだろう。想像していても実際に部屋の中を見るのはかなりシヨックになるだろう、俺は何度か経験がある。織部さんに気付かれないようにポーチの中から毒煙玉を取りだし、襖をゆっくり開けて中に侵入する。

「……やはりか。」

部屋の中は土で新たな部屋が作られ、その中に未だ上半身や胸部より上だけの状態で、恍惚の表情を浮かべる男女とその肉を貪るジガバチの幼虫、既に骨と内臓の一部に変わってしまった食べ残しが部屋に散乱し、更に異臭が満ちていた。ジガバチの親が幼虫に与える餌として複数の人間を捕まえ、麻痺毒を撃ち込み、幼虫が餌を快樂状態にし

て生きたまま新鮮な餌を食っていたのだろう。ランゴスタやネルスキュラも、幼虫を育てる際に人間やモンスターの生きたまま捕獲して巣に保存するのと同じだ。俺は幼虫を払い除けながら部屋の中を調べ、先程連れ去られた少女を捜すが見つからず、部屋を出る際にポーチチから出した毒煙玉を投げ込み、部屋から出て行った。

織部睦美 said

「……あの甲冑野郎に任せて大丈夫なのか？」

「少なくとも、蝶の化け物を倒した以上、簡単にはやられないと思うぜ。」

古宮さんをジガバチの巣の様子を見に行かせて数分、未だ古宮さんからの合図等は来ない、さつきは古宮さんの言葉に甘えてしまったけど、部屋の中、ジガバチの巣には幼虫の餌さとして他にも捕まった人がいる可能性がある、ジガバチが千歳ちゃんを運んで余り時間が立ってないといえ、千歳ちゃんがジガバチの幼虫に何時食べられてもおかしくない。私の中でじわじわと焦る気持ちが続くと、襖が開く音が聞こえた。すぐに襖の方を見ると古宮さんが襖を閉めて此方に近づいてくる。

「あのっ！古宮さん！委員長は！千歳ちゃんは見つかりませんでしたか!!」

私は古宮さんに近づき、焦る気持ちも抑えきれずに古宮さんに向かい大きな声を出してしまった。私に続いて他の皆さんも古宮さんに質問をしている、けど彼は私達に落ち

着くように促し、一度外に出る事を提案した。すぐに話さない彼に私も皆さんも少し不満げな顔をしてしまったかも知れない。家屋から出るとジガバチの巣から紫色の煙が出て……？

「あの巣に彼女の姿は見つからなかった。巣の中には大量の蟲の幼虫が居た為、幼虫を殺す毒を撒いて出てきた。彼女を探すならまた別の巣を探す必要がある。」

……毒を撒いて来た、中には幼虫がいて、つまり、部屋の中から音を出した千歳ちゃんと同じように『餌』になった人が居たはず、……彼は、その人と抵抗出来ない幼虫を毒を撒いて殺した？彼は、蟲も人も、容赦せず殺す？千歳ちゃんが……彼に……？

私の中の、妄想かも知れない考えは答えを出さず、皆さんが彼の話を聞いているときに聞こえてきたジガバチの羽音によって考えが中断されてしまった。

s a i d 古宮大地

ジガバチの巣の中で委員長少女が居なかった事、幼虫を殺す為には毒煙玉を撒いた事を話したら甲斐君からは「ケータイとかは落ちて無かったすか？」とか「本当に見つからなかったのかよ!？」って言われ、織部さんから懐疑的&恐ろしい人を見るような視線がありました。とりあえず一度待機している4人と合流して次のジガバチの巣を探そうとして居たら、またジガバチが近づいてくる羽音が聞こえてきた。

羽音に気付いた上條君と神野さんが慌てた様子だったが、すぐに織部さんの指示に従

い、近くの茂みに座り込む。少しするとジガバチと捕まった人の姿が見えてきたが、ジガバチに捕まった人の姿をみた上條君がいきなり立ち上がり、ジガバチを追い掛けて「アキラアア!!」と叫びジガバチが上條君に反応して上條君目掛けて迫り……、顎に挟み込まれる寸前で俺と織部さん、二人で無理矢理体を伏せさせ、織部さんに口を抑えられた。

「古宮さん、上條さん、動かさず、静かにしていて下さい。」

織部さんの指示に従い、その場から動かさず、大人しくしているとジガバチは俺達を探るように真上を飛んでいるだけで、此方に襲い掛かってこない。

「ジガバチは、俺達を見失っている?」

「……あの子から私達はみえてません、大型の肉食バチの多くは前後左右に敏感に反応できるけど、上下が見えていない種類が多いんです。目標の獲物が真下に消えたために見失ったんです。少しの間だけ動かないで下さい……。特に古宮さん、絶対にジガバチを攻撃しないで下さい。」

織部さんは俺に念を押して注意した。織部さんはジガバチの行動を見るのに忙しい、俺も二人を守りながら人を抱えているジガバチに攻撃するのはリスクがあるのは解る、そう言う意味もあるから念を押して注意したと思うが。暫くするとジガバチが1件の家屋に飛んでいき、織部さんがそれを見ていると、上條君が自分を奮い立たせるように

自分を激励している。ジガバチが抱えていた人は、上條君の知り合いのようで、彼はジガバチを追い掛けて走り出してしまった。俺も彼を追い掛けて走り出そうとすると織部さんが止まるように言っているが、彼等を連れ戻してくると言って俺は上條君を追い掛けて走り出した。